

コロナ禍により当日実施ができなかった、15年の雛まつりの記録集を編集

子どもと大人のにいみ雛まつり実行委員会

活動の目的

2005年に「新見おかみさん会」が中心となって、商店街の活性化と地域文化の継承を目的とし、「新見雛祭り実行委員会」を設立した。2020年度、名称を新たにし、令和の「新見雛祭り」を展開していく。「雛祭り」は、子ども達の健やかな成長を願う日本の伝統文化である。市民が大切に育み、継承してきた文化を次世代に繋いでいく時、若い世代と共に創り上げていく営みが加わることによって新見市の文化が複合的に発展していく。従来の雛祭りの伝統と文化を大切にしながら進取の気風を取り入れることにより「子どもと大人のにいみ雛まつり」の独自性が生まれる。「パパとママ、じいじ、ばあばと新見の雛祭りに遊びに行こう」を合言葉に、今まで以上の熱量で、子ども達の参加を呼びかける。若い世代が企画やボランティアに参画できる仕掛け作りをすることにより、子どもからお年寄りまでのイメージが広がり、地域活性化へと繋がる。イベントをして終わりではなく、コンセプトも含めた関係団体との協議を重ねることにより「おもてなしの新見雛まつり」が実現する。

活動の内容及び経過

計画では、4月5日(日)、①新見駅②新見美術館③御殿町④城山公園⑤新見中央図書館で、9時から16時までの時間帯に、「子どもと大人のにいみ雛まつり～パパとママ、じいじ、ばあばと新見の雛祭りに遊びに行こう～」を開催する予定であった。75の個人や団体でつくる「子どもと大人のにいみ雛まつり実行委員会」が企画し、新見市内外の子どもから大人までを対象とし、「雛祭り」の趣旨である子どもたちの健やかな成長を願うことを主眼とした催しや出店、ワークショップを展開する。「子ども色に染めよう」という趣旨のもと、広く子どもたちが楽しめる「動物ふれあい公園」「新見でパプリカを踊ろう」「カラーミーラッド」等の企画や子ども達のフリーマーケットなどに子どもたちを参画させる。雛の飾りつけボランティアやガイドボランティアも募集し、子ども達が自ら参画し、新見の町づくりを通して、多くの人と交流し、ふるさとの良さを体感させる。併せて、9月の豪雨災害支援活動とリンクさせ、ウォークラリー形式での新見の町全体でのイベントを目指していた。

活動の成果・効果

コロナ禍により、残念ながら実施できなかったが、次世代型の「にいみ雛まつり」の実現に向けて、互いの立場や主観を越えての協議が、期待感と共に受け入れられた。
○若い代の参画・交流の場へ 今回は準備期間もない中でスタートだったが、「繋ぐ」というキーワードで企画に



にいみ雛まつり①



にいみ雛まつり②

参画させたい。高齢化により、負担感が増してきた雛祭りの飾り付けや片付け、それに伴う準備などに、ボランティアの力を活用したい。雛祭りの意味やお年寄りとの交流を通じて豊かな心情を育む。

- 勝山への通過点ではなく、新見の良さを知って貰う雛まつりへ 新見の良さをじっくり楽しんでもらうためには、地域の特性や楽しみ方の協議が必要となってくる。互いの考えを出し合う中で、より良いおもてなしの「カタチ」が生まれてくる。その話し合いでの意見の交換が次への活動の起爆剤となる。
- 5つのゾーンでの複合的取組へ 新見駅周辺、御殿町、城山公園、新見美術館、新見中央図書館の5つのゾーンをポイントラリーで結ぶことにより、広く新見市を知っていただく機会となる。

今後の課題と問題点

新見市の商店街は空き店舗が増え、人通りも昔ほどの賑わいはない。商店街の活性化については、難しい課題が多い。ただ、自分達の住む地域の良さを誇りに思う心情は熱く、尊い。逆に、その想いが他を寄せ付けない大きな壁となっているのも事実である。自分達が育んできた文化を継承していきたいが、受け継ぐ者がいないという現実。誰かがやってくれるだろうという意識、関わると大変だという感情。今回、商店街の中だけでの「箱庭型雛祭り」から脱却し、「開放型雛祭り」への転換を図ることのできる格好の機会であった。実行委員会を重ねる毎に、商店街の人と他地域の人との考え方のギャップが具体的な取り組み内容の提案により、距離感が近くなってきたことも事実である。

伝統行事としての「にいみ雛まつり」の検証と分析をその年度ごとに行ってこなかったことが、ここにきて多くの課題を積み残していることとなった。一つ一つの課題に真摯に対応しながら、次世代型で新見市内外の多くの方々が参画できるようにしていく必要がある。

- 代表者：藤本忠男 ●所在地：新見市新見
- TEL：090-1016-2252
- E-MAIL：fu-yo-ma-se@mx32.tiki.ne.jp
- 設立年：2005年 ●メンバー数：75名